

『大南寔録』の成立過程(六一A)

——嘉定と仏山——

On the formation of *Dai Nam Thuc Luc* (大南寔録) (VI-A) : Fo-shan (仏山) and Gia-dinh (嘉定)

林 正子

Masako HAYASHI

Summary

The purpose of this article is to examine the process of printing and circulation of a Vietnamese historical book – *Dai Nam Thuc Luc Chinh Bien* (大南寔録正編) which was printed in 1873. *Dai Nam Thuc Luc Chinh Bien*, its title was identical with the veritable record of Nguyen dynasty (阮朝), was handled by a Frenchman Lu Gia Lang (蘆嘉陵) to a Vietnamese Dui Minh Thi (惟明氏) in French colonial ruled Cochinchina. Through the analysis of the version kept in the Toyo Bunko (東洋文庫), it is clear that the *Dai Nam Thuc Luc Chinh Bien* was printed in Fo-shan (仏山) in Guang-dong (廣東) province of China, and was distributed from Gia-dinh (嘉定) to all the Vietnamese provinces. Furthermore, to examine the applicability of his definition on *Dai Nam Thuc Luc* (大南寔録), as well as the Shih-lu (実録) of the East Asian cultural or Chinese character cultural area (漢字文化圏) in future research.

はじめに

- 一 『大南寔録正編』三巻
- 二 越南本の仏山版 ———— 以上本号
- 三 大富浪沙国蘆嘉陵
- 四 嘉定城惟明氏
- 小結 ———— 以上次号

はじめに

一九世紀後半のフランス領コーチシナでは、阮朝実録と同じ名をもつ『大南寔録正編』が流通していた。現在、ハノイ、パリ、東京で存在が確認されている同書は、刊行者としてフランス人、ベトナム人、刊行地として中国、販売地としてコーチシナが明記された商業出版物である。

ベトナムは「文献の邦」と自称して久しいが、中国の侵略、内乱などによる書厄^①も多く、現存する書物は多いとは言えない。さらに一九世紀後半に始まるフランス植民地支配の結果、多くの書物は海外に流出した。実録と同名異書である『大南寔録正編』が、東洋文庫で実見できるのは、その一例である。

周知のように『大南寔録正編』とは、阮朝の実録をさす^②。阮朝の実録は『前編』で広南国のチュア達の業績を記し、『正編』は第一紀として嘉隆帝（阮福映）の統一——阮朝の成立に始まりフランスの承認をえて即位した同慶帝の第六紀までが『前編』とともに刊行された。フランス支

配下で実録は、成泰帝、維新帝、啓定帝について編纂されたが刊行されず、抄本第六紀附紀、第七紀として保存されている（注7の付表1参照）。フエに保存されていた版本から一九三〇年代に新たに刷られた実録は、日本に運ばれて世界に公開された。戦後、この『大南寔録』を慶応義塾大学が縮刷版として刊行し流布している。『大南寔録』は、東アジアの中国型実録の掉尾を飾り、ベトナムが漢字文化圏に属した一証でもある。

漢字文化圏に属した前近代ベトナムの書物は、字儒（チュウニヨ 漢字）と字喃（チュウノム）で記された。現存する越南本の過半は漢字本であり、世界に分散している。ハノイ、ライデンや日本等の所蔵地では書目が刊行されているが、いまだ網羅的で統一した書誌学記載をもつ書目は無い。

そもそも越南本^③という呼称も、日本では二〇世紀末の産物である。『大南寔録正編』を著録している東洋文庫の書目が、『東洋文庫朝鮮本分類目録・附安南本目録』（一九三九）という附編扱いから『東洋文庫蔵越南本目録』として独立を果たしたのは、一九九九年のことであった。同書の序によって越南本とは何か、を明らかにしていこう。

編者の後藤均平氏は「東洋文庫所蔵の越南本」で

ここにいう越南本^①とは東洋文庫にある①越南^{ベトナム}で作られた漢籍（いわゆる漢喃本^②）、②中国で書かれた越南関係の文献、及び③日本人やフランス人が①を復刻した書籍の総称である。

と定義する。仏山で刊行された『大南寔録正編』は、「越南^{ベトナム}でつくられた

漢籍」という①の条件からは、逸脱する。しかし、「つくられた」という語を「著作された」と解すると、①に該当する。

東洋文庫蔵『大南寔録正編』は、癸酉（一八七三年 嗣徳二十六年）の序をもつ。序はフランス人が書き、ベトナム人が考訂し、原書がフランス人の提供であることを明記している。扉には、広東省仏山鎮の書房宝華閣の名がある。同書は中国で刊行された越南本という特異な性格、および典型的な越南本の装訂をもつ。全巻に朱筆で句読がうたれ、傍点や傍線が加えられ、人名、地名、官職等には線がひかれ、誤字は訂正されている。同書が愛蔵されたばかりでなく、読み込まれてきたことは明らかだ。

『大南寔録正編』は、「仏山版」に属するのみならず、同書自体がベトナムの書物史を体現している。すなわち漢字本で刊本・抄本が並存し、ベトナム独自の装訂の完本が日本に在る。『東洋文庫所蔵越南本書目』で史部に載せられている三巻本の刊本は、ハノイ領事永田安吉氏が寄贈したものである⁶⁾。

阮朝実録とは同名異書であることは、後藤均平氏が内容を

世祖（嘉隆帝）が戊戌起兵ノ年ヨリ、壬戌一統ノ年マデ25年ヲ、南圻ノ場ヨリ編述セシ書

と注釈していることに明らかである。阮朝実録の特徴究明とかわる「南圻ノ場ヨリ編述」された内容の具体的検討は、別稿に譲る⁷⁾。

本稿では、越南本が世界に分散している現状から、書目による追究を主とし、ベトナムの視点にたつて『大南寔録正編』が錯綜した問題をか

かえることを、明らかにしたい。以下、本号では（一）東洋文庫蔵本が天下の孤本であり、（二）仏山版に属することを明らかにし、次号で（三）フランス人蘆嘉陵、（四）ベトナム人惟明氏の同定を試みる。

（本稿ではクオックグー表記の補助符号は省いた）。

一、『大南寔録正編』三巻

現在、所在が確認されている『大南寔録正編』（以下『正編』）はハノイの三部、パリの二部、東京の一部、合わせて六部である。そのうち全三巻揃いの刊本は、東洋文庫が所蔵する一部のみである。

本節では、完本である東洋文庫蔵本をとりあげ、先行する越南本の書本——『越南漢喃遺産書目提要』（ハノイ 一九九三）、『越南漢喃文献目錄提要』（台湾 二〇〇二）の書誌情報もあわせて『正編』の特徴を検討してみよう。まず『正編』の形態を確認した後、各書目の記述をとりあげる。

東洋文庫蔵本は元の装訂を保っている。朱で『大南寔録正編』と直書された表紙は、固く黒褐色で光沢のある漆塗り。三巻の背を表紙でくるむ。書根には豎書で「皇朝寔録壹」「皇朝寔録二」と二行、その下に「嘉隆」と横書で墨書。書物の天（書頭）にも同様の墨書がある。書口の書名墨書を除いた部分にも漆が塗られている。これら漆塗り表紙、包背装、書根の豎書書名は、越南本の装訂の典型⁸⁾であり、購入者がベトナム人であったことも示唆する。

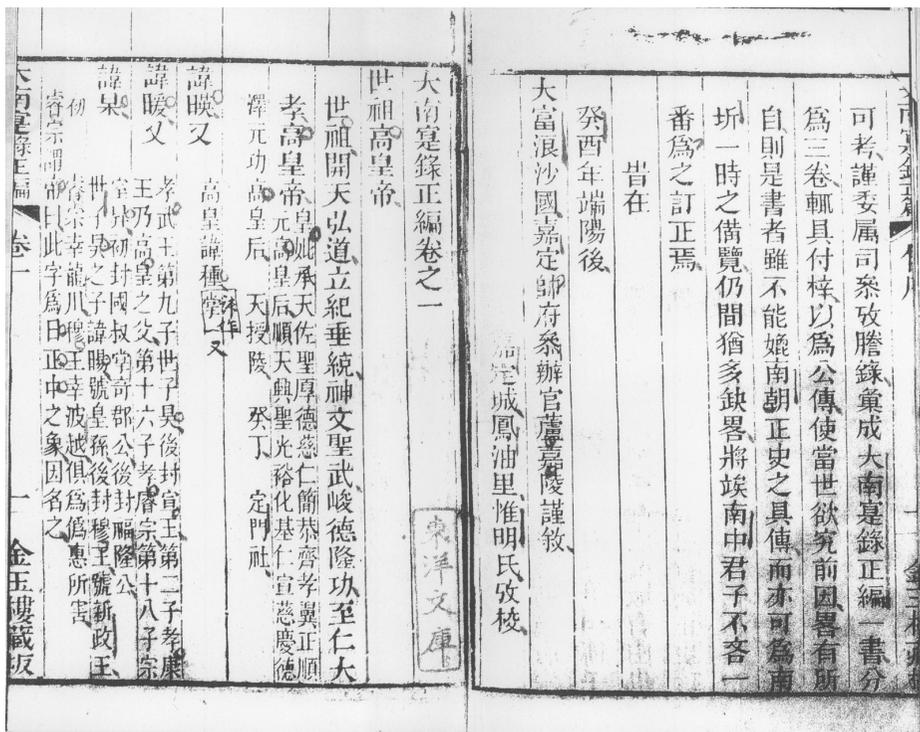


図A 東洋文庫蔵『大南寔録正編』扉

図Aにみるように、扉の中央に書名「大南寔録正編」、右上に「嘉定城惟明氏訂正」、右下に「一在提岸廣威南發客」、左下に「粵東仏鎮福大寶華閣藏板」と記す。『正編』は、コーチシナの嘉定城（サイゴン）の惟明氏が訂正して、提岸（チョロン）の廣威南が販売し、坂木は広東省仏山鎮福祿大街の宝華閣が持つという意味である。

扉に続いて蘆嘉陵の序がある（序の内容は第四節でとりあげる）。図Bに巻一の第一頁をあげたのは、版心に注意する必要がある。巻一から巻三まで全巻を通じて、版心の上部には「大南寔録」、下部には「金玉樓藏板」と刻まれている。しかし、書名に使われている「寔」字は、巻一の題と版心に限られ、巻二、巻三ではともに「実」字と変わる。

以上で書物の形態を確認したので、次に書目における『正編』について



図B 東洋文庫蔵『大南寔録正編』卷一 一葉

ての記載をみよう。まず、『東洋文庫蔵越南本書目』⁽¹⁰⁾（以下、『書目』）の全文は、次のとおりである。

大南寔録正編 全3巻 一冊 一帙

X—2—10

蘆嘉陵序（1873年夏） 活字本 24・0×15・3（匡18・5×12・5） 心：大南寔録正編（下）金玉樓蔵板 9行22字
往雙行

扉（黄紙）：嘉定城惟明氏訂正、一在提岸チヤロ広盛南発客 粵東（仏鎮福祿大街）宝華閣蔵板

序（1ℓ） V.1（戊戌（1778年）至庚戌（1791年）。46ℓ） V.2（辛亥正月至庚申（1791年）〜1800年）。51ℓ）

V.3（辛酉至壬戌（1801〜2年）。60ℓ）

（N）序末尾二記ス…癸酉年（1873）端陽後、大富浪沙国嘉定帥府参辨官蘆嘉陵謹叙、嘉定城鳳油里惟明氏攷校。表紙洪黒茶。世祖（嘉隆帝）ガ戊戌起兵ノ年ヨリ、壬戌一統ノ年マデ25年ヲ南圻ノ場ヨリ編述セシ書。

『書目』は、書名ついで序、刊本・抄本の別、寸法（版匡寸法）、版心、行数・行毎の文字数、注の形態をあげ、扉の文字を写す。さらに巻毎の葉数を記し、N（注記）として序、表紙、内容への注意を促しているが、扉と版心の書房名表記の不一致―「宝華閣蔵板」と「金玉樓蔵板」には触れていない。注記で大切なのは、「南圻ノ場ヨリ編述セシ書」と述べて『正編』がコーチシナの産物であることを明確に指摘した点である。

次節の「仏山版一覽表」に明らかのように、『正編』の刊本、抄本がハノイに在る。ハノイの書目で『正編』について追ってみよう。漢喃研究院の書目である“*Di San Han Nam Viet Nam Thu Muc De Yeu*” 3vols.⁽¹¹⁾（『越南漢喃遺產書目提要』三巻 一九九二年。以下、『遺産』）は、クオックグーのABC順に書物を並べ、本文には必要に応じてフランス語の解説が付されている。882として掲げられた『正編』の記事をみよう。【】は添えられた漢字を示す。）

882. *Dai Nam Thuc Luc Chinh Bien* 【大南寔録正編】

嘉定城 *Dai Minh Thi* 【惟明氏】校正。参辨 *Lu Gia Lang* 【蘆嘉陵】

（フランス人）序。金玉樓、粵東（中国広東）癸酉年（1873）印。

1印本 2抄本

VHv. 1702…194頁、24×15、巻1、巻2のみ、印。

A. 424…378頁、32×23、全3巻、阮主名表、祭文2、その1篇は字喃。

A. 2108…290頁、26×13 抄（缺）

阮朝の景興戊戌年（1778）より嘉隆壬戌年（1802）に至る中興の事績及び開国功臣の言動を記す。

以下はフランス語で

歴史

ベトナムの寔録の正編。広東、金玉樓版、1873。LeGrand de la

Lirayeの序。

一七七八年から一八〇二年の阮朝の再興―祖先と臣下。

と要約されている。三種の蔵本記号は、VHv.が社会科学図書館、A.がフランス極東学院蔵であったことを示す。¹⁴すなわちVHv.1702の二巻本刊本は旧フランス極東学院蔵書であり、一八七三年に粵東の金玉楼で刊行されたものである。完本であるA.424は抄本であるが、宝華閣板を写している。¹⁵

VHv.1702抄本の存在は、『書目』が記し図A、図Bで確認できる『正編』の書房名の不一致——宝華閣（扉）と金玉楼（版心）——問題を解決する。『書目』の記す巻一、巻二の*l.*（丁・葉）は合計すると九七、『遺産』の記す金玉楼版（VHv.1702）は一九四頁である。一見すると一致しないが、丁・葉は版面（フォリオ）一枚をさし、二頁に相当する。そこで一九四頁は、二分の一の九七葉となり、東洋文庫蔵本とハノイ蔵金玉楼版の葉数は一致し、宝華閣が金玉楼の版木を使って刊行したといえる。版木の移動については、次節で四堡（福建）の書房の例をあげて述べたい。

『正編』に関して『遺産』が伝えるもつとも重要な情報は、後半のフランス語部分にふくまれる。序を書いたフランス人蘆嘉陵、クオックグーではLu Gia Langと記される人名の原綴は、*Légrand de la Liraye*であると明記している。

フランス語情報は、882『正編』を「ベトナムの実録の正編」として歴史に分類している。この「ベトナムの実録の正編」という文言は、『遺産』883の咸宜帝、同慶帝の実録⁸⁸³『大南実録正編』にそのまま使われている。すなわち『正編』と阮朝実録のいずれもが「ベトナムの実録の正編」となり、『正編』の商業出版物という性格が明らかにされているとは言えない。

以上の882『正編』記事にベトナム人惟明氏についての説明はない。同書の著者名索引で「惟明氏」をひくと、454『昭君貢胡書』、882『大南実録正編』、2245『南圻六省地輿誌』、2951『仕妮書集』、3857『陳許婚演歌』の五点があり、惟明氏は「南圻六省地輿誌」の著者であることがわかる。『陳許婚演歌』には「鳳油里に住む明章氏訂正」とあり、クオックグーとフランス語で同文の「補注」が

明章あるいは惟明氏、実名はザウ村すなわち安平（チヨロン）に住む陳光光。彼はいつも鳳油里（ザウ・ラック村）の三字の後に別名を添えている。

と付されている。¹⁶さらに『遺産』「序論」末尾に付された〈著者不詳とされた有名な著者がきわめて多い〉例としてあげられた二〇点のなかに

VHv.1702『大南実録正編』惟明氏（＝陳光光）¹⁷
とある。『遺産』が惟明氏を明章、陳光光と同定していることは、明らかだ。

さて、『遺産』刊行から九年後、中国語訳が刊行された。台湾の中央研究院中国文哲研究所の劉春銀・王小盾・陳義主編『越南漢南文獻目錄提要』である。同書は『遺産』の忠実な訳本ではない。新たにベトナムの二種の書目およびフランスの四機関での知見を加え、書物の配列は四部分類に改めている。クオックグーとフランス語表記の併載が中国語に統一され、検索に便利である。同書のもつ書誌学上の問題点は、すでに劉玉瑀氏が明らかにしている。¹⁸

『正編』の特徴を明らかにするため、書目の書誌情報を手がかりとする

作業のなかで、中国語訳の出現が、『遺産』の信憑性を損ういくつかの点に気づいた。まず惜しまれるのは、越南本についてのベトナム側の情報（陳義氏の『遺産』「序論」漢字、字喃、海外流出、独自の書目等）を削除したことである。さらに書誌記事の削除や省略化、付加の根拠が不明であり、使用にあたっては『遺産』との対照が欠かせない等の問題点を『正編』についての記述から検討したい。

それでは『越南漢喃文献目録提要』（以下『提要』）の『正編』の項目を写してみよう。

0163 大南寔録正編 = Dai Nam Thuc Luc Chinh Bien / 惟明氏考正
中国粵東仏鎮金玉楼癸酉年（1873）印、今存印本一種、抄本二種

篇幅在194頁至378頁間、高24至32公分、寛13至23公分

景興・嘉隆間の編年史、署嘉定城人惟明氏考正、法国参辨蘆嘉陵序
▲按惟明氏原名陳光光、越南南方安平村人、

本書記阮朝自景興戊戌年（1778）至嘉隆壬戌年（1802）的中興事跡及一些開国功臣の言行

其中378頁抄本為全本、三卷、另有阮主名單及祭文兩篇

▲日本東洋文庫有本書嗣徳二十三年（1870）刊本

原目編為882号

漢文書

A. 424（抄本、378頁）

A. 2108（抄本）

VHv. 1702（印本）

▲ Paris BN VIETNAMIEN A.26

▲ Paris BN VIETNAMIEN A.61

（▲印は『提要』で加えられた項目）

ここには『遺産』の『正編』の項目に見られない情報としてパリ蔵の二抄本、東洋文庫の一八七〇年刊本、惟明氏の陳光光への同定がみられる。一方、祭文二篇のうち一篇が字喃であることは略されている。さらに各版の寸法・葉数を個別表記から一括表記に改めたことは、後述のように版の異同を判別する手掛りを抹消するものである。

このうち一八七〇年刊本については、まったくの誤記である。前述のように、東洋文庫蔵『正編』は一点のみで、金玉楼の版本（一八七三）で宝華閣が刷ったものである。序が一八七三年と明記していることから、一八七〇年刊本はありえない。

次に、惟名氏の原名記事は、『遺産』「序論」と『陳詐婚演歌』から編集し、『正編』の項においたものである。しかし、『遺産』が明記した「惟明氏は明章氏と同一人物で、鳳油里の住人」であることは省かれ、「ザウ村すなわち安平（チョロン）」との関係は抹消され、「越南の南方、安平村人」という意味不明の文言となっている。

『提要』の著者名索引で「惟明氏」をひくと、0163『大南寔録正編』、4766『陳詐婚演歌』、4814『昭君貢胡書』、4886『仕妮書集』、「陳光光」では『大南寔録正編』、『陳詐婚演歌』、「明章」では『陳詐婚演歌』があげられてい

る。このうち「按語」がついているのは『大南実録正編』と『陳詐婚演歌』の二点であるが『遺産』の提供した陳光光の具体的情報は、見られない。なお呉榮子氏は、『提要』補編に掲載されたライデン蔵本として、『南圻六省地輿誌』『楊玉古跡』を陳光光の著としているが、典拠は不明である。惟明氏の原名を陳光光と固定することの当否については、第四節であらためて検討したい。

二、越南本としての仏山版

『正編』が出版されたのは、広東省の仏山である。清代の仏山は、北京、蘇州、広州、泉州（福建）、徳格（四川）、西藏と並ぶ出版業の中心であった。医書、日用書、俗文学を多く出版したことで知られている。⁽²¹⁾ 本節では、張秀民氏、劉玉璫氏の研究にもとづいて「仏山版」が越南本の一環として位置づけられることを明らかにしたい。

張秀民氏は、越南本のなかに中国で刊行されたものがあるという点に、最初に注目した中国の学者である。ベトナムとの学术交流が無い時期から漢字文化圏における越南本の重要性を認め、書誌学の成果を公表されてきた。二〇〇一年に書かれた仏山版についてのまとまった書目としての最初のものには、すでにライデン大学の書目が活用されている。仏山版の存在と形態を明らかにした張秀民氏の功績は大きい。⁽²²⁾

仏山がベトナム向けの書物を出版したことは、中国の他の出版業地に見ない特色である。以下、仏山で一九世紀後半の一時期に限って登場し

たベトナム向けの書物（漢字本、漢喃本、字喃本）を「仏山版」と呼びたい。劉玉璫氏が「中国書房で出版された越南本」と規定する書物である。これら越南本の出版地は仏山のみ限定されているため、仏山版という呼称がより明確で妥当と思われる。

まず仏山版に属する越南本とは何か、を明らかにするために各書目から仏山刊本を一覧表にしてみよう。別表は、既出の『書目』『遺産』『提要』に加えてライデン大学の書目、張秀民氏、劉玉璫氏の引用の別を明記した全三二点の表である。

別表を一旦見て明らかなのは、仏山版をもっとも多く収録しているのは、ライデン大学の書目 (TRUONG Van Binh, Les Fonds de Livres en Han-Nom hors du Vietnam. Inventaire N°2 : The Han-Nom Books preserved in Leiden.)⁽²³⁾ (以下、『ライデン書目』) である。同書にはすでに張秀民氏が注目しており、『提要』の補遺には呉榮子氏による中国語訳が収められている。仏山版の形態を彷彿とさせる記述では、各書目のなかで『ライデン書目』が優れている。書物の「扉」に印刷された文字を原状のまま記載しているからだ。

『ライデン書目』の編者ベトナム人チュオン・ヴァン・ビン氏は、越南本全三八点の書名をクオックグー・アルファベット順（補助符号つき）に配列し、番号を付している。書物の扉は、クオックグー表記の後に漢字に翻字している。書誌的記載は英語。実例として、惟明氏が刊行に関わったことが明記されている三点をとりあげてみよう。

『大南国史演歌』はA、B二刊本があり、惟明氏の名がみえるのは刊本

Bである。

6. Dai Nam Quoc Su Dien Ca『大南国史演歌』漢喃 六八 刊本

2

B. 番号5803・寸法15×24 フォリオ70（1+4+65）

Aの版式と毎頁の行数・文字数は一致

扉（以下は漢字表記部分のみ掲出）

中央…大南国史演歌

上…同治甲戌年新刊（1874）

右…在提岸和源盛発客

左…嘉定城惟明氏付梓

粵東仏鎮福祿大街金玉樓蔵板

次の二点は、扉の漢字表記部分のみを掲出する。

16. Kim Van Kieu Tan Truyen『金雲翹新伝』喃 六八

扉

上…壬申年新鐫（1872）

中央…金雲翹新伝

右…僊田礼参阮侯撰

左…粵東仏鎮福祿大街金玉樓発兌

卷末葉…天子万年歳在壬申春南越嘉定城居士惟明氏重刊

30. Tay Du Dien Ca Nhi Ban『西遊演歌二本』喃

扉…戊寅年新鐫（1878）

中央…西遊演歌二本

右…嘉定惟明氏撰春月成于西寧署

提岸和源盛発售

左…粵東陳村永和源蔵板

三点はいずれも字喃本、『大南国史演歌』『金雲翹新伝』は六八体の字喃韻文であることが分かる。

さて、『正編』が刊行された当時の仏山鎮は、河南の朱仙、湖北の漢口、江西の景德とあわせて四大鎮として知られ、広東省南海県に属した。アヘン戦争後、香港に地位を奪われるまで貨物の集散地として知られた。仏山からは四川、広東、雲南、貴州の貨物が西北の諸省に運ばれたばかりでなく、輸出品としての鉄鍋は南洋各地で歓迎された。²⁶ ベトナムとの関係で言えば、清仏戦争の際に仏山で鑄造された台砲が、ランソンの勝利に貢献している。²⁷

海外まで知れわたった鉄鍋を筆頭とする手工業の種類は一七〇行を数え、紡績や織布の職人は一万人を越えたという。仏山には刻書業、印刷業、製本業が集まり、多くの労働者をかかえて安価な出版が行われていた。印刷と頁折りには多くの人手を必要とし、盛時には千人を下らない人々が働き、清末・民国初には大小二〇の書房を数えた。印刷方法も木版から石印、鉛活字へと発展し、書物は南洋群島へと販売された。²⁸ 年画の印刷も盛んで、ベトナムには「安南画」として輸出されたことも注意される。²⁹ 書物の輸出は、一九世紀末のコーチナでも続いていたことが指摘されている。³⁰

別表 仏山版一覽表

書名	文字	刊年	著者・考訂者・序	刊行地・販売地	備考	文庫	ライ ブ ン	遺産	提要	張 秀 民	劉5	劉7
1 皇越地輿誌	漢	1872 壬申年新編	嘉定城鳳油里 推明氏序	在堤岸 和源盛発客	【書目】『仏国産氏ノ藏本』による上梓	▲○	9	1485	1419	4	○	○
2 南圻六省地輿誌	漢	72 壬申年新編	推明氏撰 嘉定城鳳油里 居士推明氏序	在堤岸大市 広盛南発客	【提要】1833 広盛南大市刊（パリ蔵） 別名『南圻地輿誌』		20	2245	1481	3	○	○
3 金雲瓊新伝	喃	72 天子万年 南越嘉定城重刊 歲在壬申春重刊	德田礼参院撰 南越嘉定城居士 推明氏重刊	粵東仏鎖福祿大街	【提要】刊年不明 粵東文源堂（パリ蔵）		16	1756	4922	5	○	○
4 大南覚録正編	漢	1873 癸酉	嘉定城鳳油里 推明氏攷校	一在堤岸 広盛南発客	大富浪沙国嘉定帥府参辦官蕭嘉陵謹序 【遺産】蕭嘉陵 = Legrand de la Lirave. 推明氏 = 陳光光	▲○		882 序論	0163		○	○
5 大南国史演歌	漢	1874 同治甲戌年新刊	嘉定城 推明氏付梓	在堤岸 和源盛発客	【張秀民】1870 致中堂藏版（北京図書館蔵） 1908 觀文堂藏版		6B	867	0261	5	○	○
6 仕殿書集	喃	74 甲戌	阮居貞編撰 嘉定城推明氏訂正	仏山鎖福祿街 金玉樓		▲	2951		4886		○	○
7 雲仙古蹟新伝	喃	74 甲戌	嘉定城 推明氏訂正	仏鎖金玉樓	【劉5・劉7】1880 粵東陳村永和源藏版 別名『陸雲仙伝』『雲仙』		4214	▲4825			○	○
8 昭君哀胡書	喃	1875 乙亥	推明氏撰	粵東仏山鎖 近文堂	【提要】1885 仏山鎖天寶樓 別名『昭君新伝』『昭君貞明伝』		▲454	4814			○	○
9 白鼠書集	喃	75 乙亥年初刊	楊德号訂正	粵東仏山福祿大街 金玉樓藏版			2			5	○	○
10 林生林瑞伝	喃	1876 丙子年新刊	意豐号訂正	粵東省仏山鎖 近文堂藏版			17				○	○
11 李公新伝	喃	76 丙子年刊	楊明德撰	粵東陳村 永和源	【劉5・劉7】1876 粵東字林書局 1876 粵東永和源		1983	4779			○	▲○
12 李公新書	喃	76 丙子年新刊	楊明德撰 明章氏訂正	粵東陳村 永和源藏版	【文庫】表紙 福祿大街天寶樓書局出版 版心・李公新書・宝華書局版	○	18			5	○	○
13 西遊演歌二本	喃	1878 戊寅年新發	嘉定 推明氏撰	粵東陳村 永和源藏版			30			5	○	○
14 許使新書	喃	1879 光緒己卯年新刻	楊德氏訂正	粵東陳村 永和源藏版			12				○	○
15 三国志国語本	喃	1880 光緒庚辰年重刻		仏鎖福祿大街 文元堂藏版			27			5	○	○
16 趙五娘新書	喃	1887 丁亥新□	風油里 明章号訂正	宝華閣板	版心に宝華閣板とあり	▲○					○	○
17 新撰詞札	漢	87 丁亥	黃静齋撰	天寶樓			3199	▲4240			○	○

現在、隆盛を極めた仏山出版業の詳細は不明である。すでに二〇〇二年の時点で、陳慶浩氏は書房の痕跡も資料も見いだせないことを慨嘆している。³¹⁾しかし、往事の一斑は、書目に載った仏山版によって探れるのではないか。別表を見よう。

別表に見るように、全三二点の内訳は字喃本（喃本）が二二点、漢喃本が六点、漢字本が四点、大半をベトナム俗文学の字喃本が占めている。漢喃本は、5『大南国史演歌』、24『幼学詩演義』、25『千字文演義』、26『三字経演義』、27『訓蒙一曲歌』、31『近文堂状元幼学詩』で、ベトナム通史『大南国史演歌』以外は教育用の啓蒙書である。漢字本は、惟明氏の名のある史書三点（1・2・5）を除くと公文書の文例集である17『新撰詞札』のみである。これらの書物に中国で需要があったとは思われない。

三二点のなかで惟明氏の存在は際立っている。惟明氏は、1『皇越地輿誌』で仏山版の口火を切った後、2『南圻六省地輿誌』、3『金雲翹新伝』、4『大南寔録正編』、5『大南国史演歌』、6『仕妮書集』、7『雲仙古跡新伝』、8『昭君貢胡書』の八点を一八七二年から三年間に、一八七八年には『西遊演歌二本』、計九点を刊行している。

さて、劉玉琚氏は、仏山版の四つの特徴をあげて惟明氏に注目している。³²⁾（一）刊刻が仏山で行われ、（二）内容は俗文学を主とし、（三）校訂の大部分は惟明氏であり、（四）刊行後は広東と提岸の商号をつうじて販売された。四つの特徴の関連性についての劉玉琚氏の説明をみよう。仏山は刻書業が盛んで、広東の有名な俗文学木魚書の出版地でもあり、近

文堂、天宝楼はその主要な刻書坊であった。広東は、歴史的にみてベトナムとの海上貿易、交通が絶えない。一方、ベトナムの惟明氏は嘉定の華僑で、嘉定は華僑が開発した土地である。提岸とは嘉定の柴棍舗であり大市（チヨン）を意味し、現在のホーチミン市に属する。惟明氏は、書物を仏山で刊刻させ、中国とベトナムの商号を通じてベトナムで流通させた。すなわち仏山の刻書業、ベトナムとの地理的連繋、文化の密切さが、惟明氏の事業を可能としたと結論する。³³⁾

仏山の刻書書坊は、仏山版の刊行期——同治（一八六二—一八七四）、光緒（一八七四—一九〇八）年間に一二が知られている。

古文堂 敬慎堂 翰文堂 金玉楼 天宝楼 文光楼 会光楼 翰宝楼 天禄閣 連元閣 天吉閣 字林書局

である。³⁴⁾さらに清代から民国初期までつづいた書房として

近文堂 龍文堂 五経堂 文華閣 宝華閣 威徳印務公司
の名も伝わる。³⁵⁾『正編』にかかわる天宝楼、宝華閣の名が確認できる。

近年、明清期の出版業についての研究は、中国のみならず日本、アメリカでも盛んである。中国はアメリカ人研究者の現地調査を受け入れ、清から中華民国期におよぶ福建省の書房の事例が、解明された。C・ブロカウ氏の大作『文化における商業——福建省四堡の出版業』（二〇〇七）³⁷⁾である。C・ブロカウ氏の聞き取り調査には、四堡と仏山の書房間の連繋を示す資料が含まれている。そこで各地の出版業についての現地調査が進めば、すでに失われた仏山出版業の実態、書房の特徴などを復元しうる可能性があるだろう。

以下、『正編』の文庫蔵本にとって問題となる版本の移動について、四堡の資料をみていこう。プロカウ氏の研究は、「金玉楼蔵板」の版心をもつ版本を宝華閣が入手して、版心に元書房名を残したままで『正編』を印刷し刊行したことが、異例ではないことを明らかにした。

出版のなかでもっとも経費を要するのは、刻書——版本制作である。商業出版にとってコストの軽減となる安価な版本の入手は重要だ。広東省広州府順徳県の馬崗では農民の娘や妻が刻書に従事し、結果として工賃の安さが安価な版本をうんだ。版本は運搬に耐えるため、馬崗の版本の安さは輸送費を償って余りがあった。⁽³⁸⁾出版業の盛んな江南からも発注があり、蘇州の書房も遠路を赴いている

書房にとって書物の選定は、売れ行きを左右する死活問題である。売れ行きのよい書物や版本⁽³⁹⁾の需要は、大きかった。四堡の例をみよう。仏山との関係にしばらくと、一九世紀後期に林蘭堂は仏山の書房から書物を購入したり、版本を購入あるいは賃借した。清後期に文海楼は、仏山の小売店連元閣（前掲の一二の書房の一）、崇白堂へ刊本を卸している。そして萃雲楼は、日付は欠くものの仏山のいくつかの店との売買の簡潔な記録を残す。⁽⁴⁰⁾仏山と四堡の間に上記のようなかなり広範な関係があったとすると、仏山と提岸との関係は、国内の四堡と海外の提岸という違いだけで、卸し——小売りという関係は同じではないか。

ベトナムにおける書房間の卸し——小売り関係については、ハノイと会安（ホイアン）の例がある。⁽⁴¹⁾もともと一四世紀に中国から導入された印刷術は、限られた地——ハノイ、ナムディン、フエ等に集中し、出版業が

全土に発展したわけではなかった。⁽⁴²⁾越南本の出版業は、刻工の偏在に特徴があり、女性労働の産物としての安価な版本は、存在しなかったといえよう。安価な版本が仏山へ中国各地から書房を吸引したとすれば、ベトナムの商業出版者が、海路で結ばれた仏山から版本、書物の獲得を図るのは当然であろう。

さらにプロカウ氏は、書房は入手した版本に刻まれた元の所有者（書房）名を取り換える骨折りをしないことも、指摘している。⁽⁴³⁾東洋文庫蔵『正編』に戻ると、同書の扉に「宝華閣蔵板」と刻されていることは、図Aで明らかである。刊年不明の同書の版心「金玉楼蔵板」（図B）の文字は、一八七三年刊のハノイ蔵本と一致する。そこで東洋文庫蔵本は、ならかの理由で版本が金玉楼から宝華閣に移った後に刷られたと推定できる。別表によれば、「蔵板」として宝華閣の名が現れるのは一八八七年が初出である。一八七〇年代に初版が金玉楼から刊行された『正編』は好評で売れ行きがよく、宝華閣が版本を入手して一八八〇年代以降に同版で刊行したのではないか。

仏山版の特徴は、仏山の書房で刊行された書物がベトナムに運ばれ、コーチシナのチョロンの華人の商号によって販売されたことにある。例えば宝華閣が刊行した『正編』は、広盛南から発売されている。つまり版元と販売元の商号が異なる。版元は中国に居り、販売元はベトナムに居る。版元は清国の漢族であり、販売元はコーチシナの華人である。中国に発注して刊行された越南本を、ベトナムの華人が販売したのである。チョロンは、フランス植民地下の華人が精米業を初めとしてベトナムの

米を牛耳っていたことで、有名である。米貿易の中心地チヨロンは、仏山版によっても中国と結ばれていた。

注

- (1) ベトナムの書厄について張秀民氏は、次のように述べる。「ベトナム人は書厄として四つをあげる。一厄は一三七一年、チャンパのタンロン城(ハノイ)攻略、二厄は一四一八年、明の征服(一説では明将の張輔が、古今の書物すべてを金陵へ送った)、三厄は一五一六年、陳嵩の乱、四厄は一五九二年、後黎朝のタンロン城回復。わたしは二厄を加える。陳朝初のモンゴルの侵入、ハノイ解放時のフランス軍による略取を加え、ベトナムは前後六回の書厄を蒙っている。」「〔中越関係書目〕統編」『中国東南亜研究会通讯』二〇〇一(一一)。
- (2) 阮朝実録については以下の拙稿を参照。①「道光五旬節慶賀使節を中心として」『大南寔録』の成立過程」跡見学園女子大学『フォーラム』一八、二〇〇〇年三月②「フランス支配下における変質を中心として」(同上)③「拓殖大学論集」二四一(人文・自然・人間科学研究五)二〇〇一年五月④「阮朝の編纂事業を中心に」(同上)⑤「同上」二五〇、二〇〇三年三月⑥「『正編第四紀』の黒旗軍記事にみる編纂意図」(同上)⑦「跡見学園女子大学文学部紀要」四、二〇〇八年三月⑧「謝貴安『中国実録体史学研究』をめぐって」(同上)⑨「同上」四二一、二〇〇九年三月。
- (3) 以下、「安南本」という呼称からの脱却を明示する意味もあり「越南本」を使用。漢喃本は、広義では本稿の使用する越南本と重なるが、狭義では表記として漢字・字喃併用の書物を指し、書目で「漢」「漢喃」「喃」という表記に使用される。
- (4) 同書の奥付の編纂者は、財団法人東洋文庫古代史研究委員会であるが、序に

後藤均平氏が編者であること、編纂の経緯が明記されている。

- (5) 張秀民氏は、表記に使用された文字で漢喃本が、純粹漢文・漢文字喃対照・純字喃・国語に現在のラテン化ベトナム語(クオックグー)に四分されることを指摘(張秀民著・韓琦増訂『中国印刷史』下(浙江古籍出版社 二〇〇六)六九二―九三頁)。字喃本の位置づけについては、劉玉珺「讓論古代中越書籍形式的文化關係」(域外漢籍研究集刊)第三期 中華書局 二〇〇五)が注目している。
- (6) 永田安吉氏蔵書についての最初の報告は、石田幹之助氏が一九三三年に行なった(三松盦説書記(二)『史学雑誌』一九三三―二二)。書目は二年後に公表された(『東洋文庫所蔵安南本目録』『史学』一四―二、一九三五)。
- (7) 付表1にみるように『大南寔録』は、中国型実録の概念とは異なる構成をとっている。注(2)にあげたように筆者は、阮朝実録の特徴の解明を進めており、その一環として先行研究がとりあげていない同名異書『大南寔録正編』の存在について究明したい。
- (8) 後藤均平氏は、文庫蔵『欽定越史通鑑綱目』を典型とし、石田幹之助氏の説(本稿注(6))を参照するよう促している(『東洋文庫蔵越南本書目』参照)。張秀民氏は、宋代の装訂が書架に書物を直立させるために硬い表紙をもち、書根に書名・巻数を記入すること、およびベトナム阮朝の刊本には往々にして書根に書名を直書したのが見られることを指摘(張秀民印刷史論文集)印刷工業出版社 一九八八 二九六頁。前掲『中国印刷史』上、一五八頁)。越南本の装訂が宋代の様式を伝えることは、中国上海復旦大学古籍整理研究所教授陳正宏氏も強調する(『東アジア出版文化に於ける越南本(ベトナム本漢籍)の意義——慶応義塾図書館蔵本・東北大学蔵本を例に——』第二十二回斯道文庫講演会 二〇〇八年七月四日)。漆引きの表紙については、松尾信広『ベトナム古文獻(ハンナム) 研究院所蔵文献に関する第一次調査の報告と提言』(『東洋文庫 一九九七』)を参照。松尾氏は、厚手の越南紙の表紙が、数十年単

位の長期保存に耐え、漆塗りの場合は丈夫で、防湿・防虫効果もあることを指摘している。

付表1

(慶應義塾大学言語文化研究所版)

書名	皇帝名(①~⑫は継承順を示す)	巻数	刊行年	景印版巻数
大南寔録前編	広南朝 九代	一二巻	紹治四年	一
大南寔録正編	阮朝			
第一紀	嘉隆①世祖高皇帝(一八〇二~二〇)	六〇巻	嗣徳元年	三一四
第二紀	明命②聖祖仁皇帝(一八二〇~四〇)	二二〇巻	嗣徳一四年	五一二
第三紀	紹治③憲祖章皇帝(一八四一~四七)	七二巻	嗣徳三〇年	一三一五
第四紀	*嗣徳④翼宗英皇帝(一八四七~八三)	七〇巻	成泰六年	一五一八
第五紀	*建福⑦簡宗毅皇帝(一八八三~八四)	八巻	成泰一二年	一九
第六紀	同慶⑨景宗純皇帝(一八八五~八八)	一一巻	維新三年	一九
大南列伝前編	広南朝	六巻	嗣徳五年	二
大南正編列伝初集	阮朝 嘉隆	三三巻	成泰元年	四
二集	明命	四六巻	維新三年	二〇
*附紀	⑤瑞国公膺禎(一八八三~八三) ⑥廢帝朗国公(一八八三~八三)			
**附編	⑧出帝膺躋(咸宜帝)(一八八四~八五)			
鈔本				
第六紀附編	⑩成泰(一八八九~一九〇七) ⑪維新(一九〇七~一六)	二八巻	両廢帝	
第七紀	⑫啓定帝(一九一六~二五)	一〇巻		

(9) 阮朝寔録が「寔録」と称したことについて、陳荆和氏は「寔」字使用をベトナム独自の漢字遣いと明命帝の皇后の避諱とによると解された(『大南寔録』)

と阮朝鈔本について「稲・舟・祭——松本信廣先生追悼論文集」一九八二。「寔」と「実」はクオックグーでは *thực* と表記される。「遺産」「提要」ともに「実」で採録していることは、現代ベトナムにおける漢字への馴染みのなさを示している。注(12) オワイン論文参照。

(10) 横組の同書は次のような略号を使用。V(巻)、*l.*(丁(葉))、N(注釈)単位はセンチメートル。

(11) 第三節でとりあげるようにベトナムにおけるフランス語の漢字表記は変化しており、「富浪沙」を使用した時期は特定できる。書物の刊行時期と関わる重要な鍵である。原文保存の大切さを示す一例。

(12) 本書は、ベトナム社会科学委員会とフランス極東学院との合作であり、フランス語書名(*Catalogue des Livres en Annam*)も持つ。編者は Tran Nghia (陳義) と Francisq Gros この書目の問題点(欠陥)はオワイン氏が指摘(Nguyen Thi Oanh 清水政明(訳)「漢字・字喃研究院所蔵文献——現代と課題」『文学』二〇〇五年一一・一二月号)。オワイン氏は、植民地下のベトナムでフランス極東学院図書館が実施した古書買上政策を、正負両面から特記する。そこに掲げられた「ベトナム漢字・字喃資料の歴史」は、独立後のベトナムにおける書誌学が直面した困難を髣髴させるので転載する。(付表2)

(13) 寔字問題については注(9)参照。付表2

(14) オワイン前掲論文。

(15) A. 424抄本のコピーは、扉から始まるが、扉は図Aと一致する。

(16) 巻三、三八六頁。

(17) 巻一、四六頁(クオックグー)、七六頁(フランス語)。

(18) 劉玉珺氏は、「版本鑑定の誤り」に始まり十項目にわたって不備を指摘する。根底には中国學術の伝統である四部分類を越南本に適用したこと、劉氏の言う「漢喃研究院の古籍概念のあいまいさ」の問題がある(『越南漢喃文献目録提要商榷』劉玉珺『越南漢喃古籍的文献学研究』中華書局 二〇〇七)。

付表2 ベトナム漢字・字喃資料の歴史

年代	阮朝期文書館	年代	漢字・字喃書籍
1821	史館書院		
1825	蔵書楼		
1826	内閣書院		
1852	聚奎書院		
		1900	フランス極東学院 (E.F.E.O) 設立
1909	新書院		E.F.E.O が保大書院をはじめとする阮朝王宮の蔵書より書籍の収集、筆写
1923	保大書院		
	(図書館及びフエの個人蔵書家)		
1922	古学院図書館		
成立年代 不明	仏教学院図書館 キリスト教修道院 Pham Quynh 図書館		
1942	内閣書院→文化院 (フエ)		
1947	第一次インドシナ戦争による書籍紛失 (南部政権時代)		
1951	文化院が Pham Quynh 文庫を受理		
		1954	終戦 E.F.E.O の漢字・字喃資料、依然仏管理下に
		1958	E.F.E.O より教育部図書館へ移管
1959	文化院蔵書→フエ大学院へ	1959	教育部図書館以下より漢字・字喃書籍受理 — Ha Dong 文化局図書館 — Long Cuong Cao Xuan Duc 図書館 — Hoang Xuan Han 図書館 — 開智進徳会図書館
		1960	教育部図書館が中央科学図書館へ譲渡
1963	フエ大学院蔵書→ダラット衙文庫及び国家図書館へ移管		
		1967	中央科学図書館の二分 — 国家科学技術委員会所属中央科学図書館 — 社会科学委員会所属社会科学図書館 漢字・字喃書籍は社会科学委員会所轄に
		1970	漢字・字喃委員会設立 (南北統一)
		1975	社会科学情報院設立 漢字・字喃書籍は社会科学情報院所轄に
1978	ダラットの資料が在サイゴン第二公文書館へ移管		
		1979	漢字・字喃委員会、漢字・字喃研究院に組織変更 社会科学情報院が漢字・字喃資料を漢字・字喃研究院へ譲渡 (郷約資料は保持)
1991	上記資料、在ハノイ第一公文書館へ移管		
現在			漢字・字喃研究院、資料収集続行

Nguyen Thi Oanh 清水政明訳「漢字・字喃研究院所蔵文献」現代と課題』『文学』2005年11・12月号

中国とベトナムの書誌学上の見解の懸隔は、オワイン氏によるベトナム事情を勘案すると、中国側が「越南本の独自性」に対する認識不足にも起因すると思われる。オワイン氏は次のように述べている。「現在のように漢字・字喃が使われなくなったベトナムにおいて、過去における民族精神を理解し、世界の學術潮流に乗り遅れないためにも、漢字・字喃文庫は今後も国内の研究者にとって重要な課題となり続けるであろう」（前掲論文）。越南本の独自性については別稿を予定。

(19) 『提要』はクオックグー表記の補助符号を省いている。

(20) フランス国立図書館東洋写本室蔵。

(21) 「附録一 荷蘭萊頓大学漢学院図書館蔵漢喃古籍目錄提要」（劉春銀・林慶彰・陳義主編『越南漢喃文獻目錄提要補遺』中央研究院中國文哲研究所 二〇〇四）。

(22) 前掲『中国印刷史』上 三九六―九七頁。

(23) 張秀民氏は、『皇越地輿志』（福祿大街金玉樓 和源盛）をとりあげ、「広東の仏山の書舗が代刻し、印刷後にチョロンの華僑の商号に運び発売したのではないか」と推定している（前掲『張秀民印刷史論文集』一二頁）。越南本書目として五編がある。①「中越関係書目（国人著述）」「中国東南亜研究会通訊」一九九一―二・三、②「中越関係書目統編（甲）」同上二〇〇一―一、③「中越関係書目統編（乙）」同上二〇〇一―二、④「同上（三）」同上二〇〇二―一、⑤「同上（四）」同上二〇〇二―二。「中越関係史書目統編（三）」では「中国に流入した越籍」、同（四）では「広東刊あるいは流入した喃本書」が著録されている。張秀民氏は、越南本の書誌記載にとどまらず、書物の序に拠って筆者であるフランス人、ベトナム人の同定も行なった。

蘆嘉陵、惟明氏についての張氏の同定は、第三節、第四節でとりあげる。

(24) 前掲『越南漢喃古籍文獻学研究』一二四―二七頁。

(25) *Bulletin de l'École Française D'Extrême-Orient*. LXXVI. 1987.

(26) 明清期に鉄鍋が日本、北アメリカにも輸出されたのは、調理具ではあるが熔かして器具・武器を作るためという（黄啓臣「明清珠江三角洲の商業と商業資本初探」（広東歴史学会編『明清広東社会経済形態研究』広東人民出版社 一九八五）。また仏山からベトナムに移住して成功した洗恩球、子の耀光、フランスの大学を卒業して博士号をとりベトナム三省の翻訳官となった孫の銀輝のような人的交流もあった（仏山市地方志編纂委員会『仏山市史』上 広東人民出版社 一九九四 二〇四―八頁）。

(27) 蔣祖縁「説明清時期仏山の軍器生産」（前掲『明清広東社会経済形態研究』、広東社会科学歴史所中国古代史研究室他『明清仏山碑刻文獻經濟資料』一九八七 三五―五頁）。

(28) 張秀民、前掲『中国印刷史』上 三九六―九七頁。仏山では錫活字が一八五〇年には鑄造され、一八五二年刊の馬端臨『文獻通考』三四八卷は世界最初の錫活字本である。太平天国が蜂起すると広東の数十の州県が呼応した。起義軍は、清軍を撃破するため錫活字を弾丸に改鑄した（同上、下 六一―四頁）。

(29) 楊永智『台湾版画』晨星出版 二〇〇四、一六頁。

(30) 権上康男『フランス帝国主義とアジア——インドシナ銀行史研究』東京大学出版会 一九八五、八四―八五頁。

(31) 陳慶浩『越南漢喃籍之出版与目錄』（磯部彰編『東アジア出版文化研究』こはく）知泉書館 二〇〇四）。陳慶浩氏は、ホーチミン市ではチョロンの中国商人がベトナムの漢喃書を販売し、それらは仏山で刊刻出版されたと述べる。仏山版の一として『皇越地輿誌』『南圻六省地輿誌』『大南寔録正編』等の官書があったという。上記の三点が史書ではあるが官書でないことは、書目のみで実物に当たらないでも明らかである。

(32) 前掲『越南漢喃古籍文獻学研究』一二七―二八頁。

(33) 劉玉珺氏が、惟明氏の同定にあたって陳光光から鄭懷徳の子孫へと改めていることは第四節で述べる。

- (34) 前掲『中国印刷史』上 三九七頁。
- (35) 前掲『仏山志』上 一〇八一頁。
- (36) 例えば二〇〇〇年には、文部省科学研究費特定領域研究(A)の一つとして「東アジア出版文化の研究」(領域代表者磯部彰)が発足した。本年(二〇〇九年)には、東京大学東洋文化研究所主催講演会「はじめての漢籍」が一月一日に東京大学総合図書館で開かれた。井上進『中国出版文化史——書物の世界と知の風景』(名古屋大学出版会 二〇〇七)は、書誌的記述をこえて出版者、読者という視点から、漢籍をとりあげている。
- (37) Cynthia J. Brokaw, *Commerce in Culture: The Sino Book Trade in the Qing and Republican Periods*. Harvard East Asian Monographs 280. Harvard University Asia Center, 2007.
- (38) Ibid., p.101.
- (39) 版木は、比較的長期にわたり何度も比較的小部数を印刷するのにむく。中国社会の伝統的書籍の需給に合っており、版木の保管は重版を容易とした(銭存訓著 久米康生訳『中国の紙と印刷の文化史』法政大学出版局 二〇〇七 二一九頁)。張秀氏も近代の紙型発明以前には、市場の売れゆきにあわせて印刷できる雕版印刷の営利性が、活字印刷を圧倒していたことを指摘(前掲『中国印刷史』下 六三二頁)。
- (40) C. J. Brokaw, *ibid.*, p.259.
- (41) 『書目』は、一九二五年刊の『金雲翹新伝』(X—4—22)が、河内観文堂蔵板(扉)に「会安葉同源」の朱印をもつことを著録している。劉玉珺氏は、「会安葉同源号」朱印が、中国国立図書館蔵の一九二二年刊の河内柳文堂『越史賸評』(阮徳達)にもおされ、朱印に「西葉新書綱綱金漆什貨」の十文字を確認し、葉同源が書籍のほか薬品・雑貨を扱う商号と推定している(前掲『越南漢喃古籍的文献学研究』七一頁)。
- (42) 前掲『中国の紙と印刷の文化史』四二二頁、前掲『中国印刷史』下 六九二—
- 九三頁。
- (43) C. J. Brokaw, *ibid.*, p.309.